

▶水田の排水溝などを掘るのに利用された「ほそ」（手稲記念館所蔵）



1



▲各種「のこぎり」（手稲記念館所蔵）

▶アメリカ譲りの「洋鎌」（右端）や白を作る際に使われた「白くり」（手稲記念館所蔵）



2



4



3

道具・農具

開拓使に雇われ来札した堀三義は「北役日誌」の中に数々の洋式農具や道具が便利に使われている驚きを記しました。



5



9



10



6



8



7

◀▲水田を馬に引かせた「①ブラウ（ブラウともいう）」で耕し、田畑の土を細かくするため「②ハロー」でならしてから「③ゴロ」で苗を植える所に印を付けて、田植えをした。また、もみを直接まくことも行われており、その際に使われたのが「⑤直播機」。水田の除草に使われた「④手押し除草機」。うねとうねの間を押していくと羽が回って雑草を土の中に押し込む仕組み。以前は人の手で除草していた。稲に付くドロオイムシの幼虫をすくい取るのに使われた「⑥除虫網」。左右に振りながら虫をすくい上げていた。刈り取った稲穂からもみを取るのに使われた「⑦干藪」。⑧足踏み脱穀機。水力を利用して米や麦をつくのを利用した「⑨バツタリ」。手で回して風を起こして選別に使った「⑩唐箕」。(①・③・⑤・⑩手稲東小学校所蔵、ほかは手稲記念館所蔵)

し、「手稲村」が誕生しました。

当時の冬の様子を「手稲町誌」では「板敷の上にムシロがひかれ切り開かれた炉には、生木が燃えていた。ここでも石狩の浜と同じように、煙が室内に充満していた。燃える時間より、くすぶる時間の方が多かった。床にのべた夜具は、生木から出る水分で、湿りがちであったし、朝起きてみると、凍っている部分さえあった。それを毎朝かわかすのが、女、子どもの仕事であった」と記しています。

耕地を開く

上手稲のほとんどの地域では耕地は乾燥しがちで砂利も多く、作物の栽培に適さない所も多かったため、生計を維持するのに苦労が多かったそうです。移住者たちはその対策として、桑園を開きカイコを飼うことが多く、かなり遅くまで五天山のふもとには桑畑が残っていたといえます。少しずつ麦や豆などの栽培も始められましたが、それだけでは生計維持は難しかったため、福井や盤溪の山で造材、

炭焼きに従事して生活を支えました。

道路から一步奥に入ると、うっそうとした森林とクマザサの生い茂るやぶのため、クマやオオカミなどの野獣に生活を脅かされることも多かったようで、明治十九（一八八六）年ごろの記録に「クマ十八頭、オオカミ三十一頭を捕獲し褒賞金五百三十四円を得た」とあります。当時の五百円といえばなかなかの大金でした。野獣退治には相当の力を入れる必要性があったということです。

水田開発への道

耕地が広がるにつれ、麦や大豆などが収穫されるようになりましたが、人々には米食へのあこがれがありました。買うにしても、米価は輸送に関連して跳ね上がることも多く、自給自足を望むようになりました。水田作りには、つるはしや鍬、木のつるで作った「もっこ」などを使い、二人掛かりで石や木の根を運び、高い所は削り、低い所は土を盛り、川に沿った所